

観光ガイド台本

「くらやみ祭りと府中宿 – 江戸の旅人がぼやいた“お風呂の話”」

① 導入(大國魂神社・参道付近)

皆さん、こちらが大國魂神社です。毎年5月に行われる「くらやみ祭り」は、いまでも大変な賑わいですが、**江戸時代には、江戸近郊でも指折りの“大イベント”**でした。

当時は「六所明神」と呼ばれ、江戸から歩いて訪れる人も多く、祭りの時期には府中の町が人であふれ返ったそうです。

② 府中宿の繁盛ぶり

江戸時代の府中は、神社の門前町であり、同時に甲州街道の宿場町でもありました。くらやみ祭りの時期になると、・江戸からの参詣客、・物見遊山の人たち、・屋台商いをする人々、などが一気に集まり、旅籠(はたご)はどこも満員になりました。

③ ここで登場する「十方庵敬順」

さて、ここからが今日のお話の見どころです。江戸後期に活躍した**十方庵敬順(じっぽうあん・けいじゅん)**という人物がいます。お坊さんでありますから、旅や町歩きが大好きで、その見聞を『遊歴雑記(ゆうれきざき)』という本に書き残しました。この人が、実際にくらやみ祭りを見に府中を訪れているんです。

④ 四人部屋での宿泊体験

敬順が泊まったのは、府中宿にあった「四人部屋」という旅籠でした。そして、夜、祭り見物を終えて、楽しみにしていたはずのお風呂に入ったところ——

⑤ 「蕎麦湯のような風呂」

敬順は、こんなふうにぼやいています。「湯がどろどろして、まるで蕎麦湯のようだ」今で言えば、「これはもう、透明とは言えないね……」といった感じでしょうか。

⑥ なぜそんな状態に？

でも、これは宿が手を抜いたという話ではありません。当時の旅籠のお風呂は、井戸水を人力で汲み上げ、大勢で使う共同風呂湯を頻繁に替えるのは大仕事でした。しかも、祭りの時期は、が多い。道は土のまま、人は汗と泥だらけ、そんな人たちが、次から次へと入るわけです。ですから、湯が濁るのも無理はありません。

⑦ 「どろどろの風呂」は本当だった？

「府中宿の風呂はどうだった」という話は、後の時代に語られることが多いのですが、この十方庵敬順の記録を見ると、これは誇張ではなく、実際に体験した人の正直な感想だったことが分かります。

⑧ まとめ(情景を結ぶ)

くらやみ祭りは、府中に大きな賑わいと活気をもたらしました。その一方で、宿は満員、水は不足、風呂は蕎麦湯のよう……そんな江戸時代の“リアルな祭りの裏側”もあったわけです。こうした旅人のぼやきから、当時の府中の賑わいが、かえって生き生きと伝わってきますね。

⑨ 締めの一言(次の場所へ)

さて、それでは次は——実際に府中宿があったあたりを歩きながら、江戸時代の旅人の目線で町を眺めてみましょう。